

# マンガによる古典教育の可能性

——大和和紀作『あさきゆめみし』を教材として——

高野 英 夫

一 はじめに

古典作品を高等学校の授業で扱う際に、どのようにして古典作品に対する生徒の興味を喚起し、親近感を抱かせるのかということが、授業当初の課題であり、且つ最大の難題であると考えられる。かつては国語便覧などの資料集に収録された図版を利用し、想像力を喚起する手法などが採られてきた。ちなみに手元にある東京書籍刊『新総合図説国語』の「源氏物語」の項目を引いてみると、『源氏物語絵巻』『源氏物語画帖』『源氏物語色紙絵』『源氏物語手鏡』『源氏絵物語』などの図版が収録されている。高校生の理解の一助としてビジュアル重視による編集方針がうかがえる。以前の同種の便覧類に比較すると視覚的にかなり改善されたと考えられる。しかし、残念ながら高校生が便覧を経由して『源氏物語』に興味を抱く可能性はきわめて低いのではないだろうか。乱暴な物言いになってしまうが、要するに面白みのない、何が書いてあるのかもわからない古臭い絵でしかないのである。例えば、古典文学の研究者、美術史家、そして古美術品愛好家にとって、国宝『源氏物語絵巻』は一見の価値がある貴重な絵画作品であろう。だが、

現在の高校生にとっては、彩色の薄い、ぼんやりとして、非写実的な絵でしかないのだ。それでも活字主体の教科書に比較すれば、ビジュアルによるアプローチの方が理解しやすいことも事実であろう。

古典作品の理解にビジュアル的アプローチが有効であるとすれば、どのような視覚的メディアが考えられるのであろうか。代表的なものとしては、映像（テレビ、映画など）がまず考えられる。長谷川一夫主演の『源氏物語』『源氏物語 浮舟』<sup>①</sup>などは定評のある作品だが、昭和二、三十年代の製作であるため入手しにくくなっている。近年の作品では、アニメーションの『紫式部 源氏物語』<sup>②</sup>、天海祐希主演の『千年の恋 ひかる源氏物語』<sup>③</sup>などがある。テレビドラマでは橋田壽賀子脚本の『源氏物語 上の巻・下の巻』<sup>④</sup>があった。また、舞台作品でも、宝塚歌劇団による『源氏物語 あさきゆめみし』<sup>⑤</sup>、歌舞伎の『源氏物語』、能の『源氏物語』に材をとった『葵』などがある。

高校古文の授業において、これらのメディアはどのように扱えばよいのであろうか。生徒たちが一度視聴した後、感想を書かせるか、あるいは意見を発表させるだけで終わってしまうのが関の山であらう。『源氏物語』の本文に入る前段階、つまり導入として扱われるだけである。一方、作品を一時停止させ解説を加えて授業する方法や、質疑応答による授業を展開することも考えられる。しかし、ワンシーンごと、意味段落ごとに映像を停止させることは、映像作品の視聴方法としては最悪の環境ではないだろうか。かつて、ハリウッド大作映画に前、後編の二巻組の作品があった事実がある。もつとも、製作当初の構想から前後編に分ける予定でつくられた作品に対して、教員が恣意的に停止させる作業とではおのずと無理が生じるに違いないのである。また、近年の作品の上映時間は百分を超えるものが大部分であり、高校の授業時間内（五〇分間）に映像作品を取り込むことは困難である。映像作品を授業に利用する

ことは、視覚的には説得力があり、理解しやすい利点もあるが、授業展開が制限されるという欠点が存在することを認識しなければならない。

視覚的に古典作品を理解させ、興味を喚起させるメディアとして、映像以外にもマンガ化された古典作品がある。近年マンガは日本の有力な輸出コンテンツとして認識され、社会にも浸透し定着しているという現状がある。かつて日本のサブカルチャーといわれ、現在では日本文化の代表的なものに成長している。さらに、手塚治以来のマンガユーザーが数千万人存在する日本では、マンガほど身近なメディアは存在しないのではないだろうか。そのため、古典文学作品のマンガ化という手法は一般的に認知されている。たとえば中央公論社刊『マンガ日本の古典』シリーズ<sup>(6)</sup>、角川書店刊『NHKマンガで読む古典』シリーズ<sup>(7)</sup>（後に集英社から復刊した）などがある。特に『源氏物語』に限つても、大和和紀作『あさきゆめみし』<sup>(8)</sup>、牧美也子作『源氏物語』<sup>(9)</sup>、江川達也作『源氏物語』など数多くの漫画家が作品を発表している。さらに、『源氏物語』を翻案したマンガに至つては、高河ゆん作『源氏』<sup>(11)</sup>など枚挙に暇がない。

マンガは区切られたコマを映画フィルムのように並べることでストーリーが成立している。連続させて観賞する以外にも、一コマごとに味読することも可能なメディアである。高校の授業においても一コマごとに解説を加えながら、古典の授業を展開できるという利点がある。おそらく、現在のメディアの中では、経済的な面や入手の容易さなどからも活用しやすいものであるといえるだろう。

しかし、マンガ教材の利用といつても確立した指導法があるわけではない。高校の現場では、古典作品を理解するために、あらかじめ生徒に読ませ、作品の粗筋を理解させ、雰囲気になじませるためにマンガ教材を利用することが

多いものと考えられる。あるいは、古典本文に対して対応するマンガの箇所を抜き出して理解を図るという利用法も考えられる。こうしたマンガ教材の利用法は、副次的、いわゆる参考図版を参照して終わりという程度のものでしかない。なせもつと積極的にマンガ教材を活用できないのであろうか。もし、マンガ教材を古文の授業でより積極的に活用しようとするのなら、どのような授業展開が可能なのであろうか。本稿は高校古文の授業をより魅力ある内容にするために、マンガ教材をどのように活用することが有効なのかを考察するものである。マンガ教材としては、大和和紀作『あさきゆめみし』を使用して、『源氏物語』『桐壺』巻の授業展開の可能性を考えてみたい。

## 二 「桐壺」巻の冒頭表現

高校古文の授業で『源氏物語』が教材として扱われる場合、「桐壺」巻冒頭の光源氏誕生、「若紫」巻の紫の君を垣間見る場面を収録した教科書を使用することが多い。特に「桐壺」巻の光源氏誕生場面は、物語の主人公の出自を語るものであるだけに重視されるのは当然である。教科書の教材として定着したことで、教科書会社の授業指導集や参考資料も充実し、指導内容や授業展開についても十分に吟味され、齟齬をきたす余地がないほどに熟成されている。しかし、教科書の定番作品になるということは、授業の自由領域が狭められ、制限されることを意味してはいないだろうか。授業の中で教科書会社の指導教材集、研究書、校本類などを参照し、何の疑いも抱かずに解説を加えていくことに慣れているのではないか。その結果、高校生の意識との乖離が進み、彼らの学習レベルに立脚した指導内容と

はなつておらず、十分な理解を得られる説明とはなつていないのではないか、という一抹の危惧が生じる。そこで、次に『源氏物語』『桐壺』巻の冒頭部に関して、指導資料集に書かれた指導内容をあらためて検討してみたい。

「桐壺」巻冒頭部分を取り扱うときに、必ず要求される解説内容は、次に引用する冒頭表現の文学史上の意義についてである。

いづれの御時にか、女御・更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなききはにあらぬが、すぐれて  
時めきたまふありけり。  
(桐壺・一七頁)<sup>⑫</sup>

手元にある東京書籍刊『古典』の授業指導資料を見て、この冒頭文に関してどのような解説が必要なのか確認してみたい。

「御時」は帝の御治世。どの帝であつたか明言しないことで、読者にある特定の帝を思い浮かべさせようとする。それまでの物語にない斬新な書き出し。物語の舞台は、『源氏物語』の書かれた一条天皇の時代より百年ほど前の醍醐天皇や村上天皇のころ(延喜・天曆の御代)とされる。  
(三五九頁)

引用文中の傍線部「それまでの物語にない斬新な書き出し」とは、どのような意味であるのか詳述されていない。『源氏物語』以前の物語は、「今は昔、竹取の翁といふものありけり」(竹取物語)、「昔、男ありけり」(伊勢物語)、「昔、式部の大輔左大弁かけて清原のおほきみありけり」(うつほ物語)、「今は昔、中納言なる人の娘あまたもたまへるおほしき」(落窪物語)と語り始めるのが一般的であつた。「昔々おじいさんは山に芝刈りに、おばあさんは」と語り出される昔話などの冒頭表現と同じである。また、主人公の親の紹介から語り出されるのも共通の約束事であつたと考えら

れる。『源氏物語』は「今は昔」「昔」という漠然とした過去を想定した語り出しを踏襲せず、「いつれの御時にか」と特定の天皇を想起させる表現によつて天皇制を物語の時間軸とした歴史認識によつて語り出された最初の物語である。このある種のリアル感を有する時間軸を設定したことが『源氏物語』の冒頭表現が革新的なものであり、昔話から小説へと飛躍させた契機となつたのである。しかし、指導資料集は「斬新」な表現としか説明をしていない。高校古文の授業の中で、人間が時間を支配したいという欲望を持ち、自己の存在を時間上に位置づけようとした欲求が年号などの暦を作り出したことを説明するのは無理がある。物語の時代設定が漠然とした「昔」から、読者が実感し得る「昔」に変更されたことで、物語がリアリティーを獲得したという意義を説明し、理解を得るだけでもかなりの困難が予想される。そのため、『源氏物語』以前の物語の冒頭文と比較することで、『源氏物語』の斬新さを指摘することにとどまっているのである。こうした対読者の事情は商業誌に連載されていた『あさきゆめみし』において、なおさら制約を生んだものと予想される。

『あさきゆめみし』の場合、『源氏物語』『桐壺』巻の冒頭部の当該箇所を探してみると、原作とはまったく異なる次のような冒頭部が載せられている。

私は母を知りません。はかなげで少女のようで……すきとおるように美しい人だつたといひます。愛だけによつて生き、その生命を断つたのもまた愛であつた……と。

(二巻・一四頁)<sup>13)</sup>

光源氏の一人称による回想のナレーションとして、母桐壺更衣の生涯が簡潔にまとめられている。橋本治の『窯変源氏物語』<sup>14)</sup>も光源氏の一人称による語りの体裁であつた。両者の影響関係を明らかにすることはできないが、登場人

物の一人称による語りで物語を展開させていく手法は他にも類例が見られる。

『あさきゆめみし』はなぜ原作から逸脱してまで、冒頭表現をあらたに創造したのであるうか。まず、『源氏物語』「桐壺」巻の冒頭は、「いづれの御時にか」という表現によつて、物語が天皇制という政治システムを物語の展開装置として組み込んでいることを確認したい。天皇と寵妃との個人的な恋愛が、皇位をめぐる政争に発展することを当初から織り込んでいたのである。『源氏物語』第一部の内容は、皇位争いに敗れ臣籍に下つた光源氏が、准太上天皇となり榮華を極めるといふものである。王権獲得の物語として読まれることもある。恋愛を横糸に、政治を縦糸として編まれたのが『源氏物語』であつた。しかし、『あさきゆめみし』は、政治的物語というよりも天皇と寵妃との悲恋物語を前面に立てて、構想されたように考えられる。右の引用文中に「愛だけによつて生き、その生命を断つたのもまた愛であつた」とあることから、桐壺更衣の生を桐壺帝との愛情によつて規定する作者の意図を読み取ることができ、ここに作者の『源氏物語』「桐壺」巻の冒頭部享受のあり方、さらには、『源氏物語』の漫画化の方向性が示されているのである。

『あさきゆめみし』に関して、マンガ評論家の長谷邦夫氏による次のような評価がある。

先輩のいじめに耐えつつ、愛を育むヒロインの悲劇…、典型的な少女漫画のパターンがここに再現されている。(中略) 当然この物語はレディース・コミックらしい展開となつていく。画面も王朝絵巻の華麗な世界を、丁寧なペン線で再現し、背景もムードたっぷりな描写している。

(二五〇頁)<sup>16)</sup>

『あさきゆめみし』は少女マンガを卒業した主婦層にターゲットを絞つた初期のレディース誌『mimi』に連載

された作品である。レディース誌に連載されたことが作品の性格を規制することになった。読者層を意識して語られたため、物語を女君の視点から捉えなおし、政治などの社会事象は作品の背景に押しやられてしまっている。山本美鈴作『エースをねらへ』<sup>16</sup>のヒロイン岡ひろみに対するテニス部員からのいじめに代表される「いじめ」のモチーフ、七〇、八〇年代の少女漫画に多く見られた「ヒロインの悲劇（多くは死）」（現在のドラマ、マンガ、小説にも見られる）のモチーフは、まさに「典型的な少女漫画のパターン」であった。七〇年代末に連載がはじまった『あさきゆめみし』は、七〇年代の少女マンガファンであった読者たちに最も理解されやすい、作者自身も使い慣れた少女マンガの話を提供したのだと理解できる。

高校古文の授業では、平安時代の政治のキーワードとして、「藤原摂関政治」「外戚政治」を説明しなければならぬ。日本史の授業とリンクしない時には、古文の授業で平安時代の概略をし、当時の結婚制度などについて説明を加えた上に、上述の二つのキーワードについて解説する。学習マンガであれば欄外に注を付けることもできるが、レディースコミックでは、このような解説を入れることは読者の関心に照らしても、営業の上からも不可能であろう。作者が最低限必要だと考えた古典知識だけが、登場人物のせりふやナレーションとして挿入されている。例えば、後宮の仕組みなどは、女官が入内したばかりの桐壺更衣に説明するせりふとして処理されていた。作品の中心となったのは、女君の側からの男女の恋愛（少女マンガと異なり、男女の愛欲が描かれる）の諸相、特に光源氏の女性に対する考え方や行為によって生じた女の心の奥底の悲哀などに焦点が当てられていることである。例えば、光源氏の正妻格の紫の君の人物造型は、夫の浮気に悩まされながらも耐え続け、熟年になって若い愛人を持った夫に絶望し、女としての自己

存在のむなしさを感じるものとなっている。いわゆる熟年離婚の問題という視点からも紫の君の晩年が再構成されているのである。

このように、『あさきゆめみし』はレディースコミックという制約の中で政治的要素を極力抑え、桐壺帝と桐壺更衣の悲愛物語として語り出したのである。『源氏物語』『桐壺』巻の冒頭表現は、漫画化の過程において、少女漫画的主題へと転化されたのであった。以後、『あさきゆめみし』は、愛と死の情感によって男女の愛憎劇を描き、男の言動に傷つきながら自らの女の生を見つめ苦悩するヒロインたちの姿を描くことになるのである。この『あさきゆめみし』の読みの方向性は、高校生たち、ハイティーン層を対象にしていないので完全に従うことはできないが、男女の恋愛劇として女君に焦点を当てるといふ姿勢は十分活用できるのではないだろうか。高校生にとっても異性への関心は当然の欲求であり、興味を引かれる話柄なのである。

高校生を対象とした古文の授業では、古文の知識や日本史の知識を要求し、解釈を進めるといふ授業形態は成立しにくくなっている。そのため、どこまで古文や歴史の知識を提供するのか、その限界点が明確ではない。たとえば、高校一年生が使用する国語教科書『国語総合』（第一学習社刊）の『伊勢物語』『芥川』は「白玉か何ぞとく」の歌で本文が終わっている。原文ではこの後に登場人物たちの種あかしがあり、藤原高子や藤原基経たちが登場する。後人の補注であり、蛇足的なものであるので省略したが、指導教材集の作品鑑賞に述べられている。作品の成立の事情やまとめりといった点から省略した理由は首肯できるものである。しかし、日本史の知識事項を省略し、高校生たちの現状に対応した処置であるとも言えるのではないだろうか。実際、『芥川』の次に掲載された「東下り」では、昔男

の東下りの動機を失恋と考えることの非現実性が述べられ、官人としての前途をはかなんでの旅であると考えているようである。藤原高子をモデルに当てはめなければ妥当な読みであろう。しかし、歴史的知識問題の回避という側面も否定できない。在原業平と藤原高子との恋愛として解釈したとき、『伊勢物語』は政治的読みを要求してくる。そのとき、どのレベルまで授業で解説すればよいのであろうか。藤原高子が清和天皇の后として入内する予定の女性で、藤原氏にとつて一族の権力維持のためには、在原業平との関係を清算させることが必要であつた。このレベルでは「撰関政治」「外戚政治」までの説明が必要である。さらに、在原業平の動機までを解説すると、業平の出自や惟喬親王との関係などまで言及する必要がある。おそらく、古文の授業数や生徒の学力などを勘案すると、前者の解説だけで限界ではないだろうか。とても惟喬親王に関係した状況を説明できないし、高校生に理解させることも困難であろう。歴史的知識は極力少なくし、作品の鑑賞（多くは現代語訳すること）を主体とする授業が大勢であることが現在の高校古文の現状であり、そこに問題点も存在するのである。しかし、その問題点を逆手に取れば、古典知識や歴史知識によつて作品を考えるというよりも、物語の登場人物（『あさきゆめみし』では女君の場合が多い）の生を通して、生徒一人一人に自分自身の問題として捉えさせる授業を展開できるのではないか。それゆえに、『あさきゆめみし』の読みは一つの有効な授業の方向性を示しているといえるのではないだろうか。

### 三 桐壺帝と更衣との出会い

『源氏物語』『桐壺』巻の冒頭部分に対して、『あさきゆめみし』が独自の本文を創造し、読者に対して補足説明を加えた箇所が、「いづれの御時にか」以外にも散見される。

いとやむごとなききはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

(桐壺・一七頁)

寵妃となつた女性はたいした身分ではない、おそらく更衣の身分であろうと想像される。だが、そのような身分にかかわらず天皇の寵愛を受けているという逆説的状况に置かれているのである。平安時代は天皇を頂点とするヒエラルキーが確固として存在していた。後宮の内部でも后妃たちに対する天皇の対応は、身分制度によつて差別化されていたのである。極言すれば、天皇は天皇制を維持するために高貴な身分の女性と優先的に性行為を行うことが要求され、子孫を設けることが至上命題であつた。帝王学という名の下に個人としての存在は無視され、「天皇」としての生が要求された。天皇制が固定した身分制度の上に安定するためには、他の貴族たちをも身分に応じた社会的な位置に縛り付ける必要があつた。身分秩序を無視することは社会体制の不安定要素となり、天皇制の危機にまで至る可能性もあつたのである。天皇が後宮の后妃たちを個人的な感情で愛することは決して許されない。身分に応じて扱う、つまり性交渉を持つことが要求されていたのであつた。

それでは、なぜ桐壺帝は身分の卑しい更衣を寵愛することになつたのであろうか。物語はその事情に関して一切言及していない。おそらく光源氏誕生に際して述べられた、「前の世にも御契りや深かりけむ」という説明が、ここでも当てはまるのであろう。前世でのことが因になり、なにかの縁で現世に果として現れる、と平安時代の人々は考えた。納得できないことがあると「前世からの因縁」という一語で解決してしまう一種の省筆表現として理解すべきである。

う。高校古文の授業でも「前世からの因縁」として処理し、それ以上に深く考えることはしない。しかし、現在の恋愛小説や恋愛ドラマにおいて最も重要な場面である男女の出会いが描かれなことは決してない。このようにあいまいな設定から展開する物語に、現在の高校生が戸惑うのも当然ではないだろうか。

『あさきゆめみし』は、商業誌に連載された作品として、あいまいな部分をそのまま許容することは許されなかったであろう。原文引用という形で解釈を回避する方法も可能であったと思うが、作者の責任感からであろうか、独自にテキストを創造することを選択したのである。粗筋を簡潔に述べると、しっかりとした後見がない桐壺の更衣は、後宮の生活になじめずにいた。天皇の衣装を整理するときに、子猫がじゃれたため薄絹が風にあおられて外に飛ばされてしまう。その夜、更衣が一人で探しに行くとき誰とも知れぬ若い公達（後に桐壺帝であることが露見）と出会う。運命的な出会いであったのであろうか。名も知らぬ公達からの贈り物が連日のように届けられ、更衣はいつしかこの公達を恋慕うようになっていく。ある夜、更衣の局を人目を忍んで訪れた公達と更衣は、ひそかに結ばれたのであった。

『源氏物語』の原文にない桐壺帝と更衣の出会いの場面を、『あさきゆめみし』はどのようにして創造したのであろうか。結論から先に言えば、物語内引用とでも言うべき手法を用いているのである。まず白猫がじゃれて薄絹が外に飛ばされる設定は、「若菜・上」巻で柏木が女三の宮を垣間見する場面を利用したものであろう。

御几帳どもしどけなく引きやりつつ、人げ近く世づきてぞ見ゆるに、唐猫のいと小さくをかしげなるを、すこし大きなる猫追ひつづきて（中略）逃げむとひこじろふほどに、御簾のそばいとあらはに引き上げられたるをとみに引きなほす人もなし。

（若菜上・一四〇頁）

原作では小さな唐猫を少し大きな猫が追いかけたため、御簾が捲くれ上がり、御簾近くにいた女三の宮の姿を、柏木が垣間見してしまう。その後、柏木が女三の宮の部屋に小侍従の手引きで入り、思いを遂げてしまうのである。『あさきゆめみし』は少し大きな猫を黒猫として、六条御息所の悪霊の象徴として描いているようである。桐壺帝と更衣との出会いの場面に、なぜ猫のモチーフを利用したのかはわからない。男と女が偶然出会う状況設定を考えた際に、他者の存在しない建物外の場を考え、そこに必然的に引き出される原因として、猫によるいたずらに思い至ったのであろうか。

『あさきゆめみし』の桐壺帝と更衣の出会いの場面をさらに読み解いていこう。夜の逍遙をしていた桐壺帝は、更衣を見つけて次のように語る。

おや……これは。鬼が出るときいて退治してやろうと思ってきたが、こはいかに。羽衣を忘れた天女と見ゆる。安心なさい。こよいは闇夜……お顔をかくすことはありませんよ。あなたがどなたかわたしにはわからない。(中略)……あなたが天女なら……わたしは月読(月の精)だ……。月に顔を見られてなんの恥じることがありません。しよう。

(一巻・二四〜六頁)

桐壺帝は更衣の美しさを認め、「天女」にたとえる。この「天女」というのは『竹取物語』のかぐや姫のことである。後に光源氏も母桐壺更衣をかぐや姫に例えて、「かぐや姫のように天に昇って……」(一巻・五〇頁)と言っている。桐壺帝も「陽にすけていつかほんとうに月に昇ってしまえそうな」(一巻・五二頁)と忌々しく感じていた。『竹取物語』のかぐや姫に更衣をたとえることで更衣の死を想起させるのである。この出会いの後に、桐壺帝は名のことなく、

更衣にさまざまな贈り物をする。更衣の経済事情を調べた上での好意であつたのであろう。とくに、薰物合せの場面では、たいした道具を持たぬ更衣が恥をかかぬように、御衣や薰衣の香、そして香壺などの道具類を援助している。もちろんこれらの場面は、『あさきゆめみし』独自の本文である。桐壺帝の行為は足長おじさんの<sup>(1)</sup>なものであるが、薰物合せの場面は、『堤中納言物語』「貝合せ」で、男君が母親のいない姉弟に肩入れして援助する話に典拠を求めることができそうである。そして、最も大切な桐壺帝と更衣との出会いの場面全体は、「名のらぬ」という行為によつて特徴付けられている。この行為こそ、「夕顔」巻に語られる光源氏と夕顔との逢瀬の場面に典拠が求められるのだ。

『源氏物語』「夕顔」巻と『あさきゆめみし』から、それぞれ当該箇所を引用して考察してみたい。まず『源氏物語』「夕顔」巻から見よう。

女、さしてその人と尋ね出でたまはねば、我も名のりをしたまはで（中略）いとことさらめきて、御装束をもやつれたる狩の御衣を奉り、さまを変へ、顔をもほの見せたまはず、夜深きほどに、人をしづめて出で入りなどしたまへば、昔ありけん物の変化めきて、うたて思ひ嘆かるれど、人の御けはひ、はた、手さぐりもしるきわざなりければ

（夕顔・一五一―三頁）

女の身元を突き止められぬ源氏は「名のり」をせず、自分の正体を明かそうとはしない。わざと卑しい身なりを装つて、顔を隠そうとする念の入れようである。夫である頭の中將の北の方からいじめられ逃げ出した夕顔に、その身元を尋ねればまた姿を隠すかもしれない。源氏が夫の頭の中將の妹葵の上の夫と知られても同じであろう。また、源氏当人が世間に知られぬ逢瀬を楽しんでもいたのである。しかし、女は男の身元を知りたいと欲していた。男の身分

によつて女の生活はどのようにも変えられてしまうからである。夜更けに出入りする男の様子は、鬼の変化めいていて女は薄気味悪く思うが、一方で男が高貴な身分であろうとも皮膚感覚で感じていたのである。しかし、夕顔が確かに源氏の正体を知ることはいつになつた。小学館刊『新編日本古典文学全集』「源氏物語①」の頭注に、つぎのような解説が付されている。

この源氏と夕顔との関係には三輪山伝説を底に沈めてあるらしい。男性神が夜陰に紛れて通つてくるが、女は、素性を明かさぬ男を不審に思い、糸をつけた針を男の衣に刺して、帰り去る行方を探る。

(夕顔・一五二頁)

名のり合わぬ男女の逢瀬という特異な状況は、なるほど三輪山伝説という古代の神婚説話を踏まえていたのである。源氏と夕顔との恋愛は、神秘的でありながら不気味な趣を漂わせている。

次に、『あさきゆめみし』の当該箇所を引用して考察してみたい。

(源氏)「あなたはいつたいどのだれ。名まえくらいあかしてくださつてもいいでしょう。」(中略)(夕顔)「女房たちはあなたが三輪山の神さまで、夜だけ人の姿になつておいでになるのではないかといつていましたわ。」

(中略)(夕顔)「あなたがどのどなたでも……。あなたがあきるまでおそばにいさせてくださるだけでいいの……。」

(一巻・一四七〜八頁)

名前を明かさぬ夕顔に対して、源氏も自分の正体を隠して、若狭の受領の息子であると偽ろうとする。仮面舞踏会のごとき匿名の男女の情交が交わされるといふ特異な状況が展開していく。また、源氏を「三輪山の神」になぞらえて、神が人間の女と情を交わす神婚説話と重ねられている。原作をほぼ忠実に漫画化しているように感じられる。し

かし、夕顔の人物造型は、原作において受動的な女として表されていたが、『あさきゆめみし』ではより受動的な、非主体的な性格の女として造型されている。藤壺の宮への恋に苦悩する源氏の心を無条件に受け入れ、癒しを与える存在として、夕顔の受動的な性格を積極的に拡大解釈し直している。原作にあつた源氏の身元を探ろうとする処世的な夕顔の姿は抹消されている。変わってすべてを受け入れ、運命に抗うことを知らぬ無垢なる一人の女が誕生したのであつた。

このように、「夕顔」巻に語られた「名のらぬ男」のモティーフ（三輪山伝説）は、『あさきゆめみし』の桐壺帝と更衣との出会いの場面に遡上して利用されたことがわかる。前に引用した出会いの場面での桐壺帝の発言中に、「わたしは月読だ」とあつたのも、三輪山伝説のアレンジであると考えられる。「かぐや姫」に桐壺更衣をたとえた故に、月の連想から「月読」に桐壺帝がたとえられたのであろう。天孫である天皇との一種の神婚説話として構想されているのであつた。

ところで、なぜ桐壺帝と桐壺更衣との出会いの場面に、「夕顔」巻が利用されたのであろうか。例えば、「猫」のモティーフは、柏木が女三の宮を垣間見する場面から借用したものであつたが、必然的な理由はわからない。推測すれば様々な理由が考えられるかもしれないが、推測の域を出ないのである。だが、桐壺更衣と夕顔との間には共通のモティーフを共有しているという理由があつた。その理由とは桐壺更衣と夕顔の人物造型の類似性である。そこで、桐壺更衣の人物造型をまず見てみよう。桐壺更衣は父大納言に早く死に別れ、父の遺言で桐壺帝の後宮に入内した。そして、桐壺帝の寵愛を受け、第二皇子（光源氏）を出産する。しかし、弘徽殿の女御たちからのいじめによって亡くな

った。桐壺帝は更衣の死を嘆き悲しんだ。性格的には気の弱い、はかなげな女であった。以上が桐壺更衣の生涯といふことになる。

次に、夕顔の人物造型を見てみたい。夕顔は父の三位中将と母を早く亡くしていた。頭の中將に見初められ結婚し、一女(後の玉蔓)を出産する。しかし、頭の中將の北の方のいじめに会い、姿を隠してしまった。その後、源氏に出会い、廃院に出かけた際に物の怪により殺されてしまう。源氏は夕顔の死を嘆き悲しんだ。性格的には気の弱い、はかなげな女であった。一見して、桐壺更衣と夕顔との生涯の類似性が確認できるであろう。源氏がこれほどまで夕顔に心を惹かれていくのも、意識的にせよ無意識的にせよ、亡き母桐壺更衣との類似性に起因する。特に「いじめ」のモチーフに関しては、桐壺更衣をいじめた弘徽殿の女御と夕顔をいじめた北の方とは共に右大臣の娘であり、姉妹であった。また、桐壺帝が自身の過度の寵愛が原因で更衣を死なせてしまったのと同様、源氏も廃院に夕顔をむりに連れ出したために夕顔を死なせてしまったのである。桐壺帝と源氏の両者の嘆きには自責の念が含まれることも類似している。さらに、楊貴妃の故事を共通の典拠にしていることも類似する。桐壺帝と桐壺更衣との悲恋劇は、唐の玄宗と楊貴妃との悲恋を下敷きにし、『長恨歌』(白居易)『長恨歌伝』(陳鴻)の引用によって構成されている。「楊貴妃の例」(桐壺・一八頁)とあることや、「上達部、上人などもあいななく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり」(桐壺・一七頁)が、『長恨歌伝』の「京師ノ長吏モ之カ為ニ目ヲ側ム」からの引用であることからわかる。夕顔」巻の「長生殿の古き例はゆゆしくて、翼をかはさむとはひきかへて、弥勒の世をかねたまふ」(夕顔・一五八頁)も、『長恨歌』の一五〇八行「七月七日長生殿 夜半無人私語時 在天願作比翼鳥 在地願為連理枝」を踏まえている。楊貴妃の

悲劇的結末が、構想の当初から桐壺更衣と夕顔にも用意されていたことを示すものであろう。

『あさきゆめみし』は、桐壺更衣と夕顔との類似性を理解した上で、桐壺帝と桐壺更衣との出会いの場面を創造するために、源氏と夕顔との逢瀬の場面を転用したのである。この作業は決して独りよがりな創作ではなく、作品研究によつて導き出され、論理的に理由付けできる挿話となつていことがわかる。それゆえに、高校の古文の授業では、桐壺帝と桐壺更衣との出会いが省筆されている点に関して、『あさきゆめみし』を一例として生徒に提示すればよいのではないか。桐壺の更衣と夕顔との類似性、『長恨歌』や楊貴妃の話題、さらには猫をモチーフとした柏木と女三の宮との密通事件などについても授業の内容を展開することができそうである。

#### 四 桐壺更衣へのいじめと死

『あさきゆめみし』は、『源氏物語』『桐壺』巻が省筆表現によつて詳細に言及していない箇所を、他の物語を利用したり、一種の物語内引用の形で補足した挿話を創作し漫画化した。その他には、どのような漫画化の方法を用いているのであろうか。『源氏物語』『桐壺』巻の原文と『あさきゆめみし』とを対照して、考察を試みたいと思う。

いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかずあはれなるものに思ほして、人の誹りをもえ憚らせたまはず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。

(桐壺・一七頁)

桐壺帝の寵愛を独占する桐壺の更衣に対して他の后妃たちの憎悪は激しい。その恨みが蓄積したのか桐壺更衣は病

がちの身になり、里下がりも度重なつた。桐壺帝はそのように心細げな更衣の様子をますますいとしく思う。人々の非難に遠慮する余裕もないほど、更衣への思いは募るのである。この箇所には予断をはさむ余地はなさそうだが、『あさきゆめみし』は、世間の非難の中を愛情だけを頼りとして生きようとする孤立した男女の姿をより強調して描く。それは桐壺帝の騎士的言動に端的に表れている。

(帝)「よい……それならばわたしのほうが桐壺に去向こう。(更衣)「いいえ、そのようなことをなさつてはほのかたがたが」。(帝)「かまわぬ。人がなんといいおうとわたしはあなたを守ることに決めたのだ。神かけて。」

(一巻・四〇頁)

他の后妃たちのいじめが激しくなつたため、桐壺更衣は帝の居住する後涼殿に渡ることもままならなくなつた。このいじめとして例示されるのが、「糞尿ばら撒き」「馬道閉じ込め」の事件である。

参上りたまふにも、あまりうちしきるをりをりは、打橋、渡殿のここかしこの道にあやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾たへがたくまさなきこともあり、また、ある時には、え避らぬ馬道の戸を鎖しこめ、こなたかなた心を合はせてはしたなめわづらはせたまふ時も多かり。

(桐壺・二〇頁)

『源氏物語』が桐壺更衣に対するいじめの一例として列挙している箇所である。「あやしきわざ」がどのような内容であるのか具体的には描かれていないが、着物の裾を耐え難いほどに汚すということから、糞尿を撒き散らしたのであろうといわれている。このようにいじめに合い、心身ともに苦しむ桐壺更衣に対して、桐壺帝は自分が桐壺(淑景倉)にまで出向こうと言つ。『源氏物語』では、桐壺更衣が嫌がらせに苦慮している様子を見た桐壺帝が、不憫に思つて善

後策を講じている。

数知らず苦しきことのみまされば、いといたう思ひわびたるをいとどあはれと御覽じて、後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司をほかに移させたまひて、上局に賜す。  
(桐壺・二〇頁)

異例なことに後涼殿に上局を与えて、桐壺更衣が嫌がらせを受けぬように配慮している。ただし、桐壺の更衣が上局を与えられたことで、もともと後涼殿に仕えていた他の更衣の局が移動させられている。この更衣の恨みは激しいものになったとある。『あさきゆめみし』では、上局の件は一切触れられず、事実反して、帝が自身で更衣の局を訪れるという行為をとらせている。上局の説明は理解されにくいと考えたのか、それとも桐壺帝のむごい仕打ちを描かないためであろうか。ただ、『あさきゆめみし』では、桐壺帝の覚悟を示す言葉として、「愛は人を鬼にも邪にも変える」「たとえ何者が相手であつても、わたしはそのために鬼になつてみせる」(一巻・四四頁)と語らせている。愛する人を守るためならば、たとえ酷薄な仕打ちでも厭わないと発言させている以上、上局の件を描かなかつたのは、説明の煩雑さと話のまとまりを図るための省略であろうと考えられる。『あさきゆめみし』はこの「上局」の件を省略し、「馬道閉じ込め」の事件で雨に打たれ、体調を崩した桐壺更衣が危篤状態に陥つたことを描く。『源氏物語』では、里下がりや許さぬ桐壺帝の常軌を逸したほどの愛着が桐壺更衣の体調を悪化させ、取り返しつかぬ事態に至つたとしている。『あさきゆめみし』は、いじめを直接の決定的な死因として描いたようである。

次に、桐壺更衣が重態に陥り、里下がりして亡くなつた場面を見てみたい。

日々に重りたまひて、ただ五六日のほどにいと弱うなれば、母君泣く泣く奏してまかさせたてまつりたまふ。

かかるをりにも、あるまじき恥もこそと心づかひして、皇子をばとどめたてまつりて、忍びてぞ出でたまふ。

(桐壺・二一―二頁)

病状が悪化しているにもかかわらず、桐壺帝は更衣の里下がりを許さず、後宮にあつて様子を見るようにと留めていた。そのため、更衣は危篤状態に陥つて、いつ命が事切れてもおかしくない状態になつてしまった。ここに至つて、更衣の母尼君が泣く泣く里下がりの許可を求めて直接奏上した。宮中に死や血の穢れをもたらすことは何人たりとも許されない。桐壺帝も断腸の思いで来世の契りを幾度も交わして更衣を送り出すのである。このとき、更衣は若宮(源氏)を宮中に残していく。あるべからざる不面目な事態を憂慮しての処置である。他の后妃たちからの嫌がらせを心配してとも考えられるが、おそらく、更衣が途中で息絶えるという事態を考えての処置であろう。若宮にまで穢れが及ぶことを憂慮し、回避したのである。しかし、『あさきゆめみし』では、更衣の臨終の際に若宮が付き添つている姿が描かれる。更衣は若宮の顔を見ながら我が子の行く末を思いつつ息を引き取るのである。『あさきゆめみし』は更衣の死に関して、穢れのことを一切紹介していない。更衣が死ぬために里下がりにすることも、典葉寮の医師らしき老人が進言することに従つただけである。当時の穢れの問題は、方違えの風習と共に説明しにくいものである。風水占いなどが現在でもあるので、当時の人々には日によつて良い方向と悪い方向があつたぐらいの理解は可能であろう。しかし、穢れの問題(人類学的説明)を説明することは、ハレとケの説明も絡み高校古文の授業では扱えないのではないだろうか。穢れを避けるため桐壺帝が更衣の死に立ち会えぬ理由を説明するだけでも難しいであろう。ここにこそ愛する妻の臨終に立ち会えぬ桐壺帝の無力感(絶対的な権力者でありながら、何一つ思うとおりにならないという存在の落差)や、

一旦宮中を出てしまつては二度と会えぬことを恐れる気持ちの方が更衣の里下がりの機会を遅らせたことに繋がるのであるが。まして、我が子を残して一人実家に帰り、死を迎える母親の姿は理解できないにちがいない。そのため、『あさきゆめみし』は、桐壺帝の逡巡の様子や穢れの問題、そして若宮を伴わない件に関してはかなりの省略を施したのであろうと考えられる。

『あさきゆめみし』が『源氏物語』を漫画化する際の選択の基準は、第一に対読者意識（読者の関心や知識レベルに対応）、第二に少女マンガの典型的主題（一種の勧善懲悪主義）、第三に商業的な価値（収益性の問題）、などに分けられると考えられる。もちろん、作者の趣味的要素も大きく絡んでいると思われるが、以上の三点が、漫画化されるときのある程度の取捨選択の基準になっているのではないだろうか。

## 五 まとめ

『あさきゆめみし』が『源氏物語』を漫画化する方法は、対読者意識による古典の知識、歴史の知識に関する取捨選択が一つの基準になっていた。「藤原摂関政治」「外戚政治」「天皇制」「穢れ」などの諸問題については、説明をできるだけ省略するといった方法がとられていた。その一方で、『源氏物語』が省筆した桐壺帝と桐壺更衣との出会いの場面は、物語内引用とでも言うべき手法をとって、「夕顔」巻や「若菜・上」巻を利用して、新しく出会いの場面を作り出している。しかも、桐壺更衣と夕顔との類似性を念頭において構想されていることがわかる。高校古文の授業で

は、『源氏物語』のような長編物語は、場面ごとの読みになってしまふという欠点がある。桐壺帝と桐壺更衣の物語に「楊貴妃の故事」が踏まえられていて、夕顔の場面にも関連しているという視野を拡大させるような読みが、『あさきゆめみし』で提示されていたのである。古文だけを読んでいては決して結び付けられない驚きが、漫画化されてわかりやすく示されているのである。

対読者意識に関連して、七十年代の少女マンガの典型的な主題が『あさきゆめみし』の構想を支えていた。『源氏物語』冒頭表現を、光源氏の母桐壺更衣回想のナレーションに変更している点に主題の集約が見られるのである。「いじめ」や「ヒロインの死」という逆境の中で、男女の愛が無垢なる結晶として表現されている。敵役は敵役として描かれ、桐壺帝は騎士的存在（王子様）として強調される。いたいけな美しい姫君を、意地悪な魔女から救い出す王子様というおとぎ話の枠組みを利用して構想されたのであろう。桐壺帝の寵愛を獲得した桐壺更衣の一種のシンデレラストーリーとして明確に漫画化され、さらに、愛する夫と我が子への愛情ゆえに死んでいくという母性愛を描き、シンデレラストーリーから母親の物語へと展開されている。ここに少女マンガ誌ではなく、レディースマンガ誌に連載されていたという制約が見られる。恋する乙女的な価値観が、対読者を意識したときに妻・母という立場を反映した物語へと変更されたのであろう。

『あさきゆめみし』は良くも悪くも対読者を強く意識した作品である。高校古文で扱う作品の中に、生徒の興味を喚起し身近な問題として意識させる作品がどれほどあるだろうか。古典作品の中には現代的な主題を有しているながら、古典の知識や歴史の知識を解説する中で置き去りにされ、生徒たちの目から隠されているものがあまりに多いのでは

ないだろうか。『あさきゆめみし』を主体にして、『源氏物語』を読み解いていくという授業は、高校古文の教科書に載る本文からでは気づかない、特に教員が気づいていないか、あるいは常識となっているために疑問に感じることもない、あいまいな記述などに注意を向けさせる。そして、『あさきゆめみし』は対読者意識によって漫画化された作品となったことで、生徒の側にも驚きと疑問を抱かせるような授業を展開できる可能性があるのである。ただし、漫画化された作品ならば全てに当てはまるということではない。学習教材として作られたマンガの場合、漫画家の自由裁量の領域がかなり狭められているために読みの問題が生じにくいのである。漫画化された作品を、原文の代わりに効率よく読ませようとするのであれば、学習教材として開発されたマンガを与えればよい。しかし、これでは原文の読みを拒否した、矮小化された授業になってしまうであろう。漫画化された作品を読むことで、原文との違いに気づかせ、なぜそのような差異が生じたのかを、生徒一人一人に原文に戻って確認作業させることが大切なのである。

マンガ化された作品から古文を読み取るうと考えたときには、漫画家個人の読みが反映した作品こそが、読者の代弁者として作品の問題点を浮き彫りにしてくれるに違いないのである。本稿では、高校古文の授業を漫画化された教材によって実践する可能性を論じてきた。どのように授業展開を計画するのかという授業案の提示は、次の機会に譲りたいと思う。

注(一) 『源氏物語』 主演長谷川一夫、監督吉村公三郎、一九五一年。 『源氏物語 浮舟』 主演長谷川一夫、監督衣笠貞之

助、一九五七年。

- (2) 主演風間杜夫、監督杉井ギサブロー、角川映画、一九八七年。
- (3) 主演天海祐希、監督堀川とんこう、東宝、二〇〇一年。
- (4) 主演東山紀之、脚本橋田壽賀子、TBS、一九九一〜二年。
- (5) 主演愛華みれ、二〇〇〇年。(二〇〇七年にも再演された)
- (6) 『源氏物語』長谷川法世作、中央公論社刊、一九九六〜七年。
- (7) 『源氏物語』鳥羽笙子作、角川文庫刊、一九九二年。(後に集英社で刊行、二〇〇六年)
- (8) 大和紀作、講談社刊、一九七九〜九三年。
- (9) 牧美也子作、小学館刊、一九八八〜九〇年。
- (10) 江川達也作、集英社刊、二〇〇一〜五年。
- (11) 高河ゆん作、新書館刊、一九八八年・十二月。
- (12) 『新編日本古典文学 源氏物語①』、小学館刊、一九九四年。以下、『源氏物語』の本文引用は同書による。また引用本文中の記号等は論者が付したものである。
- (13) (8) に同じ。ただし、引用本文中の記号等は論者が付したものである。
- (14) 橋本治作、中央公論社刊、一九九一〜三年。
- (15) 『漫画の構造学』長谷邦夫作、インデックス出版、二〇〇〇年。
- (16) 山本美鈴作、集英社刊、一九七八年。

(17) ウエブスター作の『足長おじさん』による話型。孤児のヒロインを富豪の青年が匿名で援助し、後に二人は結婚するとい  
う話。日本の古典では、『堤中納言物語』の「貝合せ」が同じ話型である。